

ボランティア、過去の津波被災地の首長、日本経団連のパネリスト4氏が意見を述べた後、日本として、そして私たちが被災地にどんな支援ができるか、課題も含めて議論を交わした。

■支援、具体的には

川戸さん 熊岡さんもそう
お感じですか。

熊岡さん 現地のNGOや

が、一番大事で、例えば食料を四輪駆動車に積んで村へ行って「はい」とあげられるということでは、大規模な組織を持つ国際機関、

が、国民を切り分けてN N P O（非営利組織）の強みに

は、50〜100キロ程度の

の村の愛情をよく知れば、

く動ける点と、その情報の中

リット、精神を忘れちゃいけ

中央政府や日本に返す力がある

川戸さん 現状ではへりやな予算をつけて、船やへりから首都まで、パリからワルシ

ヤワぐらいの距離。私が困っている、イエズス会の方がこう言うのです。「日本の大

石川さん 今回の国際緊急援助隊は、原則外務省の国際緊急援助隊長が隊長となり、JICAと常にチームを組んでいます。

川戸さん もっと大掛かりなプロジェクト（現コンゴ民主共和国）にいた当時、ジャングルの奥地で、著名な邦人研究者が悪性マラリアで倒れ、修道会のネットワークで連絡が入りました。現場か

使館は、アフリカにいるのに飛行機を持ってないんですか。返す言葉がない。「じゃあ、うちの飛行機を買ってあげよう」と。その先生は助かりました。そういうエピソードで、

お察しください。

川戸さん タイは援助を断ってきました。その点をどう考え、お金はどこに回したのですか。

石川さん タイの態度は立派です。お金はインドネシアに回しました。援助とは一時的な慈善ではなく、長く続く連帯です。今回の緊急援助で

00万^{ドル}。子供の防疫や予防注射です。次に世界食糧計画(WFP)の6000万^{ドル}。食べることで、中長期には、学校給食を応援してほしい。食事ができれば孤児は学校に行く。そこで読み書きそろばんを学びます。お弁当を持たせて帰せば、幼い弟たちに夕飯を食べさせてやれます。

で具体的に何かありますか。

石川さん 国連女性開発基金（UNIFEM）には200万¹円出しています。少ないように見えますが、事務局の消化能力を考えました。

川戸さん 孤児の里親制度を日本の少子化と併せて考えているという意見が会場からありました。

でも大事です。ただ残念ながら、今はまだスリランカ、インドネシアなど現地の受け入れ態勢ができていません。システムがいずれ構築されることをが大事だと思います。

■紛争、宗教問題

川戸さん 被災地では紛争状態のところもあり、宗教問

要
さん熊岡

コーディネーター

川戸恵子氏

II-TBS解説委員



かわど・けいこ 66年TBS入社。報道局の政経部、政治部副部長などを経て、政治部解説委員兼選挙プロジェクト担当。日本記者クラブ企画委員、日本選挙学会理事、自衛隊倫理審査会委員。

点だと思っています。二次被害を防ぐため何ができるかという

点で、官と民の連携について話します。一つは、今回、津波警報が遅れました。日本では地震が起きると、津波の危険の有無がラジオやテレビで流れます。こういう仕組みの必要性を改めて感じました。自然災害の問題に強い民間研究所やNGO、NPOもあり

国境を越えてネットワークを作るのは政府機関より早い。その強みを生かして、津波警報的なものや災害対応にも参画できると思います。

二つ目は、難民キャンプや戦争・紛争地域、被災地で、政府の治安業務に空白ができた時、特に子供や女性が被

軍や自衛隊が活動しています。ヘリコプターや船舶、医療隊を持っているし、機能的と判断されているのかもしれない。ただ、逆の立場になっても、私たちの地域で自然災害が起きた時、外国の軍隊が来たらどうでしょう。長期的に見れば、日本の人道支援で

構（JICA）系で動いている緊急援助隊やNGO、NPOのほうがよいと思います。日本では、民がまた育っておらず、官が出ないといけない。この悪循環を突破して、10年、20年後の総合イメージを政府も民間も持つべきだと思います。